
ウィザーズ・サークル 驚く僕を見て爆笑する先輩

ッ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウィザーズ・サークル 驚く僕を見て爆笑する先輩

【Nコード】

N3111R

【作者名】

ツ

【あらすじ】

自他共に認める「暗いやツ」の火野は、ブレザーを取り戻すために向った神社で謎のコスプレイヤー(?)に出会う。彼女が言うには火野には「特殊な力」があるかもしれない、らしい。頭がオカシイんじゃないか、と逃走のタイミングを伺っていた火野だが、超常現象を次々に見せつけられ……。超能力？ 魔法？ それとも……。非日常、いやいや、至って日常系ストーリー。

00001 (前書き)

驚くくらい中途半端な終わり方をしています。
お気をつけを。

高校に入学して一ヶ月が過ぎたけれど、俺には未だに友達がいない。クラスメートと会話らしい会話をしたことなんて全く無いし、昼休みは大抵、机に突っ伏して寝たり、机に突っ伏して寝たフリをしたりして過ごしている。どんな奴だよ、って？　どこのクラスでも一人はいそうな「暗いやツ」をイメージしてくれば、多分、正解。

まあ、つい一か月前、というか、高校に入るまでは、そんなことなかった。普通だった。でも。

最近になって、用もないのに誰かに話しかける事。面白くなくても相手に合わせて笑う事。それが、どうしようもなく馬鹿らしく感じるようになったのだ。

そうしたら、他人とどう接すれば良いのか、わからなくなった。で、今の状態。

「――以上。……委員長、号令」

担任の声で、我に返った。何の話だったんだろう。

00001 (後書き)

読んで頂いた方、ありがとうございました。
感想・評価、お願い致します。

帰りのホームルーム。

後ろの席で、クラス委員長が舞台女優のような凛とした声で号令をかけた。

「起立、気を付け、礼！」

はいはい、さようなら。

一緒に帰る奴なんていない俺はとつとと教室を出ようと、バッグを肩に掛け、後ろの椅子を見て、……気付いた。

ブレザーが無い。

確か、午前の授業中に脱いで、椅子の背もたれに掛けたはずだ。でも、ない。

結構ピンチである。

朝、駅から学校までを一人だけワイシャツで歩くのは、夏季略装の日にちを間違えてしまったみたいで目立つし、何とか学校に着いても、校門で生徒指導の教師に声を掛けられるだろう。通り過ぎる生徒から無数の視線を受けるに違いない。

想像しただけで、恥ずかしい。今すぐ走り出したくなるほどに。

「ねえ、火野くん。何か貼ってありますよ」

振り向くと、委員長が首を傾げて微笑んで、椅子の背もたれの裏を指さしていた。委員長に初めて声をかけられたことに少し動揺しながらも（というか、クラスメートと話したこと自体、一、二回しかないのだけれど）、裏を見ると、折りたたまれた紙がテープで貼ってあった。何か書いてある。委員長がグツと手を伸ばしてそれを剥がし、バサッ、と振って広げた。

「『ブレザーの在り処を知りたければ、本日四月三十日の午後七時、升賀神社に来るべし！』ですって。……何のつもりでしょう」

台詞でも読むような抑揚のつきすぎた声で読み上げると、委員長は僕に紙を差し出す。なるほど。A4サイズのコピー用紙に筆ペン

か何かで委員長が読み上げたままの内容が書かれていた。割と達筆。ご丁寧に、裏面にはググールの地図が印刷されている。

「……イジメですね。しかも計画的な！」

委員長がガッツポーズのように胸の前で両手を握った。可愛い。

「許されざる行為です。確かに火野くんは見た目からして根暗で、ヲタクで、中二病で、ムツツリっぽくて、尚且つ、ロリコンっぽいんです。イジメたくなるのもわかりますけど……。でも！ でも、駄目なんです！ イジメは、駄目！ のー、もあ、いじめ！ 委員長として、このクラスにイジメがあることが許せません。見過ごす訳にはいきません！ そう！ 先生にチクりましょう！」

俺は委員長の発言に傷ついたが、委員長は頬を紅潮させて、ニンマリ。（可愛い）……と思ったら、突然、「はうっ！」と変な声を出した。

「だが、しかし！ 先生にチクると、『おまえ、チクッただろ？』ってことで、恨みを買って、後で私まで巻き添えを食うかもですね……。それは、……嫌です。何で火野くんなんかのために、高校生活を棒に振るなんて……。御免被りたいです」

いや、俺も頼んでないし。

委員長は、バッグを「おいしょっ！」とリュックのように背中に背負って、

「やっぱり、私にはどうすることもできません！ ……しょうがないから、午後七時に行くしかないんじゃないですか？ 健闘を祈ります。では、ごきげんよう！」

と、声優のようなハッキリし過ぎた声で言い残して、猛ダッシュで教室を出て行ってしまった。

……というか、俺、一言も発してなかったな。

00002 (後書き)

評価・感想、お願いします。

「火野くん！」

駅に入ろうとしたところで、名前を呼ばれた。見ると、コンビニから出てきた委員長が駆け寄ってくる。手には食べかけのカレーパン。レジにいる時点で食ってたとは思えない。本当に委員長なのか、お前。

「遅かったですね。大分待ちました。立ち読みだけで済ませようという心づもりだったのに、腹の虫にせがまれて、つついカレーパンなんて買ってしまったじゃありませんか。もう、お金がありません。来週、ジャンプが買えないじゃないですか！ どうしてくれるんですか？」

知らん。というか、立ち読みしながら食ってたのか。……ドン引きだ。

「……待たせた覚えはないんだけど。何で待ってたんだよ？」

と言うと（一か月以上学校で誰とも話していなかったから、緊張して変な声が出たり、タンが絡んだりしないか？ と不安だったが、家で姉と話していたおかげで、普通に声が出せた。ありがとう、姉様！）、委員長は「おお！ 火野くんって喋れるんですね。意外です！」と心から意外に思ったように呟いてから、人差し指をビシッと俺に向けた。

「火野くん、駅に来たってことは、神社には行かないですよね？」

火野くんは臆病者でいらっしやいますから、神社なんて行けるはずもなくって、家に帰るのだろう、と推測して待ち伏せていたんです。ビンゴでしたね！」

「いや……」

俺に限らず、夜の神社に來いなんて言われたところで、のこのこ行く奴なんていないだろう。怪しすぎる。人気のない暗がり。寄って集^{たか}って袋叩きにされるかもしれないし、カツアゲされるかもしれ

ない。それどころか、行ったところで誰もいないって可能性だってある。

「さあ、共に参りましょう！ 升賀神社へ！」

共に？ さすが委員長。やっぱり助けてくれるのか。

「どうすることもできない、って言ってただろ。気が変わったのか？」

すると委員長がニヤリ、と笑う。物凄く邪悪な感じ。

「だって、面白そうじゃないですか！ 陰で眺めてるぶんには！」

……委員長は馬鹿だった。ついでに言うと、彼女を一時的にでも「可愛い」ってしまった俺も、一瞬でも「助けてくれるのかも」と思ってしまった俺も、馬鹿だった。

00003 (後書き)

感想・評価、お願いします。

腕時計を見る。七時二十五分。

委員長に腕を引かれて半ば強引に連れて来られ、俺は今、神社にいる。

升賀神社。

……ここ、ちゃんと管理されてるんだろうか。神主はいないらしく事務所のような建物はない。手を洗う水が溜まっている石の容器（その名前が書かれているらしい木板が横にあったが、掠れていて読めなかった）には水が半分ほどしか無く、竹筒から水は流れていないし、おまけに置いてある柄杓ひしゃくの底は抜けている。拝殿も言っちゃ悪いが俺が十七年の人生の中で見た建築物の中でワーストスリーに入るような、ボロいものだ。昼間でも来る奴なんて少ないだろう。おまけに、明かりは電灯だけ。住宅街の中にあるのに、周りを林に囲まれているため、かなり暗い。

そんなわけだから、当然、俺以外に人影はなかった。……ああ、と言っても、少し前まで俺の横でマガジンを読んでいた委員長が、林のどこかに潜んで、ニヤニヤこっちの様子を観察しているはずなのだが。

あるいは、委員長はもう、待ちくたびれて帰ってしまったかもしれない。時間が経ちすぎている。……やっぱり誰も来ないのだろうか。「殴られずに済みそうだ」と思い、それから「それだと、明日学校に行くのは嫌だな。休みたい。でも、どうやって……」と割と本気で悩みだす。そのうち、体中に冷えピタを貼って寝たら、翌朝、風邪を引いてるんじゃないだろうか、と閃いた。熱を冷ますためのアイテムで熱を出す。逆転の発想だ。俺は天才かも知れない、と一人興奮した、そのとき――。

カラリ、カラリ、と音がすることに気付く。徐々に近づいてくる。誰かが石段を登ってくるらしい。やがて姿を現したのは、一人の少

女だった。華奢な両肩を流れ落ちる長い黒髪。電灯に照らされ輝く、白い肌。大きな瞳。キュツと噤んだ唇。俺と同じくらいの歳か少し下に見える、子供っぽい、けれど鋭さがある顔立ちの少女。彼女が身に付けているのは白い着物と、赤いスカートのようなもの……。巫女の衣裳だ。

石段を登りきったところで巫女は立ち止まる。そして。夜風のような透き通った、でも妙に力強い声で言った。

「火野、悪い。待たせた」

うん。俺は巫女を待った覚えはない。

「どちら様ですか？」

「私？ ブレザーの在り処を知る者、だよ」

予想外。つまりこの巫女が犯人ってことか？ ……てか、何で巫女が俺のブレザーを盗むんだよ。女子高に忍び込んで女子高生の上履きを盗んで行く変態の話なら聞いたことがあるが、あの類か？ いや、絶対に違う。

「……それで、俺のブレザーはどこにあるんですか」

巫女が目を細め、ニヤリと笑った。妖艶、って感じ。昼間見た委員長の下劣なニヤリ、とは何かが違った。まあ、と彼女が呟く。

「そんなことより——」

そんなことⅡブレザーで良いのか？ 俺はブレザーを取りに来たんだが。巫女はフウ、と息を吐き出して真顔に戻って、言った。

「——火野、君には特殊な力がある、かもしれない」

00004 (後書き)

評価・感想、お願いします。

「火野、君には特殊な力がある、かもしれない」

巫女はカラリ、カラリ、と近づいてくる。俺の前で立ち止まった。透き通った声。

「ポルターガイストって知ってる？」

オカルト？ てつきり、「特殊な力。それは、私を癒す力、だよ……？」てな感じの愛の告白を……って、冗談だぞ。俺は自分の身の程をよく知っている。当然、自分に特殊な力なんてないことも。——えっと、何の話だったかな。ああ、ポルターガイストだ。

「心霊現象か何かですよ」

「そう。もともとはドイツ語で『騒がしい霊』って意味の言葉。物が宙を舞ったり、物音がしたり、電灯が点滅したり、突然発火したり、寒気がしたり、幽霊が見えたり、って現象。実はね——」

嫌な予感がする。

「——信じられないだろうから、くだらない冗談って思って聞いてほしい。私にはポルターガイストを引き起こして、コントロールする力がある。そして、火野。君にも」

やっぱり、と俺は呟く。一応言っておくが、別に自分が能力者だという自覚があったわけではない。やっぱり、の後に続くのは「この巫女は邪気眼（※痛い設定を自ら作り上げてそのキャラになりきるタイプの中二病を患いし者）だったのか」だ。邪気眼なんて、都市伝説のようなものだと思っていたけれど、本当にいるんだ……。巫女——というか多分ただの巫女装束のコスプレイヤーだろう——はカラリカラリとその場で回りながら、意味不明、理解不能な妄想を語り続ける。

「ポルターガイストは『レイ』の動きによって起きる。一般的に想像されるような幽霊とか霊魂とかとは微妙に違うから、漢字の『霊』ではなく片仮名で、レイ。レイは、見えないけれどどこにでもいる、

世界を取り囲む一つの巨大な生き物のようなものだって考えてくれれば良い。ただし、存在ではない。概念やイメージのようなものだから」

もう帰りたい。でも、ブレザーを取り返すまで帰れないんだよな。そもそも、人の話を途中で遮って帰れるような俺でもない。

「このレイをコントロールすることで、物を浮かせたり、火を熾したりできる。誰にでもできるってわけじゃない。素質があるのはもちろんのこと、厳しいトレーニングを積まなきゃいけないから。漫画とか軽小説とかでは、ある日突然、眠ってた力が目覚めたりするけど、そんなことは現実ではありえない」

いやいや、トレーニングしても眠っていた力が目覚めることはない。本当は気づいてるんだろ？ もう超能力者ごっこはやめにしよう。あるいはさ。本当に超能力者なら、その証拠に俺の心を読んでくれ。そして、さっさとブレザーを返せ。

……だが、当然俺の心なんて読めるはずもなく、巫女装束のコスプレ美少女は

「だから、火野。今日から毎日、ここでトレーニングしようね」

とのたまって、俺を見つめる大きな瞳をスッと細め、悪戯っぽく微笑むのだった。

00005 (後書き)

疲れたよ、パトラッシュ。
感想・評価、いただけると幸いです。

00006 (前書き)

書き終わったら、おなかが減ったお。
おなかと背中がくつつきそうだお。
ハンバーガー買って、噛みしめてきます。
では。

「入って」

そう言って巫女（の恰好をした邪気眼コスプレイヤーね）が俺の背にあるボロボロの拝殿を指差す。俺が戸惑っていると、彼女は「もう」と呟いて、段ボール箱くらいしかない賽銭箱を跨ぎ、段を登った。触っただけで大破しそうなボロボロの戸を開けると、そのまま真っ暗な建物内に入ってしまった。仕方なく俺も後に続く。

中に入ると、すぐに巫女が戸を閉めた。明るさはほとんど変わらない。戸は格子状で外からの光が射しこむから。それでも、やっぱりボロボロの神社。薄気味悪い。ブレザーなんて諦めて帰ってしまったおうか、と思っていると、巫女は巫女装束の腰に挿してあった蠟燭を、片方の手で引き抜き、反対の手の甲を向けてヒラヒラと振った。下がってろということだろうと解釈して俺が離れると、巫女は小さく頷いて、振っていた手を袖から出すように上げ、前に突き出す。その手を軽く広げ、手のひらを上に向けた。形の良い唇を少し尖らせ、ヒュッと掠れた口笛。そして……

——そして。

結論から言おう。

彼女は『本物』だった。

俺は左右視力2.0の我が目を生まれて初めて疑った。巫女の手のひらからいきなり炎が熾ったのだから。湧き出したという感じに。呆然と見つめる俺。炎に照らされて爛々と輝く巫女の瞳が、ただ驚くしかない俺を見つめ、楽しげに細められた。

やがて。いや、すぐに、だったのだろう。巫女は蠟燭に火を灯す。右手から炎は消え、腕をぶらんと降ろした。

「い、今のは……」

蠟燭を床に置くために屈んだ巫女に、俺は尋ねる。

「うん？」

巫女が俺を見上げて首を傾げた。

「今のは、ポルターガイストなんですか？」

すると突然、神秘的だった巫女の様子が一変。長い髪を振り乱して倒れ込み、床に顔を押し当てて「アッヒュッヒュッヒュッヒュッ！」と、普通の人間が（まあ、目の前の彼女はどうかやらの普通の人間でないらしいが）上げてはいけないような奇声を上げ始めた。足をバタつかせ、床に散らばった自分の髪を片手で握ってぐいぐいと引っ張り、反対の手で床を叩きまくる。シュールすぎる光景だった。身体の中で何かが疼きだしたのだろうか。それこそ、邪気眼のように（言ってる意味がわからない奴は邪気眼で検索してくれ）。

俺がその様子を何とも言えない気分で眺めていると、凄まじい音。本当にボロい神社だ。床に穴が開いた。瞬間、巫女は動きをピクツと止めたが、すぐにさっきより激しい奇声を上げ始め、今度は床をもがくように転がり始める。

ひとしきり、巫女装束を汚した後で、巫女は寝ころんだまま、子供のような笑顔を俺に向け、息も切れ切れに叫んだ。

「こんなに笑ったの、久しぶりだよお」

笑ってたのか。それでも、シュールなことに変わりはないが。

「何がおかしかったんですか」

間が持たないから一応訊いてみると、巫女はえっ、と表情を固め、「……うん、私も初めて見たときはそういうリアクションしたな、ってね……」

しどろもどろで呟いた。

「いや、それにしても——」

少し慌てたように立ち上がって、巫女が俺を見る。ニツと笑った。イタズラ好きな子供のような表情。やめてくれ、状況が状況じゃなかったら惚れそうだ。

「——火野って驚くと可愛いね」

ドキッとした。でもさ。それなら驚いていないときは可愛くないんだろ？　なんて考えてしまうひねくれ者の俺だ。可愛いはずがな

い。

00006 (後書き)

感想・評価、頂きたいです。

00007 (前書き)

この作品にひと段落ついたら、バトルものが書きたいです。
この作品にひと段落つくのが、いつになるか分かりませんが。

巫女が蠟燭に向かうように、床に正座。俺も制服が汚れるのを少し気にしながらも、ずっと巫女を見下ろしているのも変な気がして、蠟燭を挟んで彼女の正面に腰を下ろした。

で、だよ。

今やつと思っただが。

巫女は本当に、その……、ポルターガイスト使いらしい。ならば、彼女が言う、俺にポルターガイスト使いになる素質がある、っていうのも本当ってことじゃないか。すると、何だ。俺はこれから、ポルターガイストを悪用する謎の組織を相手に、世界を救うために対決したり、目の前の巫女を危機から救ってそこから恋愛に発展したりするのだろうか。

ははは。ラノベみたいな展開だな（あまり読んだことないが）。夢みたいだ。それが吉夢か悪夢かは知らないけれど。

いろいろと想像していると、巫女が襟から巫女装束の中に腕を突っ込んで、何かを取り出す。黒い、布？

「とりあえず、これ」

それを受け取って広げてみるが、本当にただの、黒くて細長い、ハチマキみたいな布だった。

「えっと……、これは？」

「目隠し」

「目隠し？」

「今からやるのは、レイを強くイメージできるようにするトレーニング。石ころを眺めて、漠然と、浮かべえ、浮かべえ、なんて念じたって力が分散しちゃってダメでしょ？ 上手くポルターガイストをコントロールするためにはレイの『見えない手』が、石ころをつまんで、持ち上げるイメージしなきゃいけない」

具体的なイメージを持つことで、力を集中させられるってことか。

「それで、何で目隠しが必要なんですか？」

「見えない手をより強くイメージするために、余計な視覚的情報を遮断する」

「へえ。で、トレーニングって俺は何をするんですか？」

「その目隠しをした状態で、頭の中で『見えない手』が自分の体に触れるのをイメージするんだよ」

「自分の体？」

最初から炎を出したりできないのか。目隠しして自分に触るだけなんて、地味過ぎる。俺の不満を感じ取ったのか、巫女がたしなめるように言う。

「自分の体に触れば、コントロールしながら、同時に、手がちゃんと目標の物体に触れているのか確認できるでしょ」

訊きたいことはいろいろあったが、とりあえず「なるほど」と相槌を打っておく（これが俺が馬鹿たる所以だろう）。巫女はそんな、適当な返答に満足したように

「よろしい」

と言いながら立ち上がると、俺の後ろに回った。俺は首を曲げ、目で追う。

「宙に浮かぶ、透き通った手をイメージして。なるべくハッキリと。その間、私は後ろで手を鳴らす」

ぱんっぱんっぱんっ、巫女が拍手。

「八十九回目の音が聞こえたところで、もっと集中して、その透き通った手で自分の体に触れる。簡単でしょ？」

「……はい」

簡単なのか？ やったことがないからわからないが。

巫女が片手を膝に当てて、前屈みになる。長い髪が俺の顔の両脇を伝った。

「貸して。つけてあげる」

自分でつけられるが、何だか恥ずかしくなって、目隠しを渡して、後を向く。目を閉じた。布が当てられ、後ろで結わかれ、……ちょ

つとキツすぎる。

「忘れてた。注意事項があるんだ。トレーニングを始めたら、目隠しは絶対に外しちゃいけない。そのまま潰れるかもしれない、目が。気が狂うかもしれない。死ぬかもしれない」

騙したな？ そんなに危険なら、最初からやらなかった。逃げよう。今すぐ逃げよう。俺は、慌てて目隠しを外そうと、手を当てた。が、そのとき。巫女が耳元で囁く。

「脱ごうかな」

何を？

「今気づいたけど、この服って、いろいろ不都合なんだよね」

服！？ おいおい、正気かよ。俺は変な興奮とパニックに襲われ、慌てて止めようとするが、目隠しを外す前に、布の擦れる音。そのうちバサッと、床の上に何かが置かれた。

耳元で、透き通った甘い声。

「今一度忠告しておくよ。目隠しは取らないでね。私があればいい姿でいるって知ってて、それでも目隠しを取るって……。わかるよね。火野は私が服を着るまで、目隠しを外せない。外したら、私、警察呼ぶ」

何てこった。これじゃあ軟禁同然じゃないか。目隠しを取ったら、裸の少女。……くそう！ 真面目な性格の俺だ。外せるわけが無い。腕力では絶対的に俺の方が勝っているはずなのに、布切れ一枚で完全に動きを封じられた自分が情けなくなった。

力が抜けた腕を、床の上に降ろす。後ろで可笑しい笑い声を上げている巫女を、自分の備わっている不要な羞恥心を、それら全てを生みだしたそもそもの原因であるビッグバンを、ただ、怨みながら。「イイね。始めるよ」

巫女がその両手を打ち鳴らし始めた。

00007 (後書き)

感想とか、くださったらありがてえです。

00008 (前書き)

いつも読んでくれて、ありがとうございます。

俺の頭上で、巫女が手を叩き始めた。ばん、ばん、ばん、と。

……なんかさ、目隠しした俺の後ろで淡々と巫女が手を叩く……だけ。特殊能力覚醒のシーンにしては地味すぎるんじゃないか。やつぱり漫画なんかとは違うんだろうか。

頭上から巫女が言う。

「意識を集中して。明確な見えない手のイメージができれば教えてね」

その声は心なしか苦しそうだ。もしかして、彼女は手を叩いているだけではなく、何か難しいことをやっているのかもしれない。何しろレイ（俺にはそれが何なのか未だによくわからないが）を呼び寄せているんだからな。地味でも俺は今、雑念を払い、ただ、意識を集中するべきなのだろう。巫女が頑張ってくれているんだから。俺は脳内に透明な、「見えない手」を思い描こうと努めた。

「強く、強くね。もっと、もっと」

巫女の声に合わせ、真っ暗闇の視界に浮かぶ手が、段々とハッキリしてきた。透き通った声に合わせて。打ち鳴らされる手の音に合わせて。よし、いける気がする。これ以上無いくらいにはっきりと、イメージできた。

「イメージ出来ッー」

そこまでで、俺は言葉を切った。なぜって、突然髪が引っ張らり上げたのだ。かなり強く。俺は小さく悲鳴を上げた。それに続いて、今度は何かが頭を撫でるような感覚。鳥肌が立った。これは、髪の上をうごめく……。

……手？

と、次の瞬間。頭の左側に、殴られたような鈍く強い痛み。突然の衝撃に耐えきれず、正座をした状態の俺の体が右に傾く。ああ倒れるな、とぼんやり思った。

倒れ行く俺。でも何だったんだ、今のは？ 確かに手だった、気がする。でも、今のが「見えない手」だったのか？ 本当に？ ……素直には信じられない。ハッキリしすぎた感覚だったから。もしかして、あれは巫女の手だったんじゃないだろうか。そんなことを疑って、けれど、すぐに気付く。彼女は今も手を叩き続けている、と。俺がこうして倒れ行く間も、一定間隔で。それなら、あれは…。

——衝撃。床の軋む音。それに続いて、埃っぽい匂い。

俺は確かに、その「手」に押され、床に倒れこんだ。

「大丈夫？ 一応、具現化はできたけれど、まだコントロールは上手くできないみたいだね」

巫女が驚いたように、叫ぶ。

俺は急いで、目隠しを取った。

信じたかったんだ。あれが本当に「見えない手」だと。だから、俺はすぐに目隠しを取った。誰かがこの中に潜んでいて、俺を触った可能性を完全に否定するために。

決して、断じて、変態なんかじゃない。すっかり忘れてたんだ。

……なので、どうか警察だけは勘弁してください。

「ッひゃ、何で!？」

俺の視界に飛び込んだのは、小さく叫びながら慌てて背を向ける、あられもない姿の巫女だったわけ。

それ以外に、誰もいなかった。

誰も。

「やっぱり本物の『見えない手』だったんですね」

とりあえず、白い背中に向かって、言っておいた。

00008 (後書き)

意見・感想、くださいますと、助かります。

もう、自分でも方向性がかめません。

プロットはあっても、その中で、僕の意志に反して、キャラクターがエロくなる一方です。

00009 (前書き)

気付いたけど、これ、コメントしづらいんじゃないかな……と。
読んだのバレたくないような小説なんじゃないか……と。
ごめんなさい。

眠い。

昨日の夜は結局、ほとんど寝られなかった。超常現象のこと、巫女のこと、一度にたくさんの突拍子もない経験をしてしまったものだから、目が冴えてしまったのだろう。

ベッドに入ってもなかなか眠れず、やっと眠れたと思ったら、今度はいちいち説明するのもはばかられるような訳のわからない夢を見て、気付いたら朝になっていた。

そんなだから、電車で立っていても、駅から学校まで歩いていても、常に気を抜いたら眠ってしまいそうな状況だったが、それでも重い頭を揺らしながら、眠い目を擦りながら、何とか学校に到着。階段を登って、教室のドアを開け、

――で、まあ、眠気が吹っ飛んだ。

ドアを開けると同時に頭に響くような、聞いているこっちが恥ずかしくなるような、抑揚の付きすぎた声。委員長だ。

「火野くんはやっぱり変態だったんですね！」

教室中の奴らが一斉に俺を見る。勘弁してくれ。アクティブな彼女のことだ。昨日もどこから覗いてたのかもしれない。正直、心あたりはありすぎるが、まさか「うん、俺はド変態だよ」と認めるわけにもいかないから、とりあえずとぼけておく。

「何の話だよ」

委員長の前にある、自分の席に着くと、そのまま机に突っ伏した。これ以上その話をする気はない、という意思表示のつもり。

「なぜ顔を隠すのですか？ 後ろめたいことがあるからなんですか？」

鈍感な奴だ。それでも俺は机に突っ伏して無視。そのうちに黙るだろう、と。けれど、彼女はひとりで喋り続け、あげく、

「会ったばかりの巫女さんと真っ暗な神社に入って、何してたんで

すか？ 壁が薄かったから、聞こえましたよ。『もっと、もっと、強く、強くう！』」

これにはさすがに俺も飛び起きて、

「馬鹿！ ……ちょっと来い」

口を尖らせて、「ぱしぱしぱしとお、二人の腰があ、ぶつかり合ってえ〜」とか、わけわからないことをほざき続ける委員長の腕を掴んで、無数の視線とざわめきを背中に感じながら、教室を出た。

「オマエ、委員長だろ。下品な発言は慎め！」

階段を登りながら、委員長に言う。

「委員長がエッチじゃいけませんか？ 委員長である以前に、私は一人の女の子なんです」

「痴女ってやつか」

「いえいえ、腐女子です」

うわあ、最悪。

「ねえ、『委員長がエッチじゃいけませんか？』って我ながら名言です。ラノベのタイトルにでもしましょうよ」

「その前に中身を書け」

「それは、経験が豊富な火野くんが自らの体験談を踏まえて」

「豊富じゃねえよ」

「書いてはくれるんですね！？ よかったです！」

そんな、どうでも良い、犬も食わない、それどころか何か吐き出してしまふんじゃないか、という会話をしているうちに屋上のドアの前についた。

数年前までは普通に入れたらしいが今は入れない屋上。

……本当に開かなくて良かったよ。もしドアが開いたら、俺は委員長を突き落としてしまふところだったから。

「それで、見てたのか？」

「何をですか……、ああ、巫女さんとの神秘プレイのことですね」
神秘プレイ？ 何だそりゃ。……と思いつつも、何となく言わんとしていることがわかってしまう俺は、やっぱり変態なのかもしれ

ない。

「ご安心ください。壁に張り付いて、聞き耳を立てていただけです。しかも途中からですからね」

覗いていたのならあの場に起きた怪奇現象、つまり「手」を見たんじゃないかと少し期待していたのに。……まあ見られてたら、恥ずかしすぎて身悶えるところだったが。

「だったら余計に誤解してるだろ」

「私は誤解してるんですか？」

委員長が首を傾げる。

「俺は、……そういう行為はしてない。実は、俺には少しだけ特殊な力が……」

そこまでで言葉が詰まった。

ポルターガイスト？ レイ？ 見えない手？ そんな馬鹿な説明できるはずがない。頭がイッてる。

それに、一応、委員長は俺が高校に入学して初めてまともに話した奴なんだ。まだ一日しか経っていないけど。こんな変人でも。……嫌われたくない。

俺が逡巡していると、それに気付いたのか、委員長が柔らかに微笑んだ。すごく、優しく、可愛いかった。

「大丈夫です。私は委員長。クラスメート全員の味方です。火野くんもクラスメートでしょ？ だから……私は火野くんの味方なんですよ？」

暖かい手が、そっと俺の手を包み込む。何故だろう。泣きそうだ。俺は、自分からクラスの人間をあえて避けているつもりでいた。それでもやっぱり、寂しかったのだろう。

誰とでも話せる奴らがうらやましかったのだろう。

だから、彼女に自分もクラスメートだと言われただけで、どうしようもなく嬉しかった。あそこにいることを認めてもらえたみたいで。いてもいいんだと教えてくれたみたいで。

「……ありがとう」

つい、呟いた。すると頬を赤く染めた委員長は、汗をダラダラと垂らしながら

「だから全てを話してください、お二人のプレイのことを！ 特殊な力ってどんなんですか？ 舌づかい？ 指づかい？ はたまた蠟燭！？ え、コンニャク！？ というか初体験ですよ？ 初めての揉み心地はどんなでしたか！？」

俺は、俺の手を包み込む汗ばんだ変態少女の手をキツく掴むと、それを力任せに下に引っ張り、彼女を床にブッ倒した。

途中、彼女の関節から不吉な音がしたが、気にしない。つか気にならない。

00009 (後書き)

感想・コメント・評価、あったらください。

00010 (前書き)

荒い部分もあるかと思います。ごめんなさい。

校門で携帯電話を弄っていると、後ろから爽やかすぎる、俺にとっては、もはや毛穴が総立つくらい不愉快な声。

「火野くん、待っててくださいたんですね。行きましょう！ イクって、ヤラシイ意味じゃありませんよー」

もちろん、委員長だった。

ホームルーム前、誤解を晴らすために昨日の出来事を委員長に話したのだが、そのとき、つい今日も巫女に神社に来るように呼ばれていることを漏らしてしまい、なぜだかというか当然というか「巫女さんの裸が拝めるんですね」とか呟いて、委員長もついてくると言い出した。

放課後になって、委員長から担任に用があるから校門で待っていてくれ、と言われた時には、正直委員長なんて放置して先に行ってしまうかと思ったが、それでも、俺の性格からして、待っていてくれと言われて、待っていないなんて、できるはずもなく、結局、委員長の言いつけどおりに校門の前で、三十秒に一回くらいのペースで鼻の頭を触りながら、待っていたのだ。

「意外と早かったな。用って何だったんだ？」

別に訊きたくもないが、委員長を放っておくと、どうせまた下ネタを吐き始めそうだから一番遠ざかりそうな話を振ってみる。

「火野くんがクラスに馴染めていないようだ、火野くんは人見知りが激しそうだから、と先生に相談されたんですよ」

「……俺の事か。で？」

「近頃では巫女さんと思議な力を使ったエッチをしたり、虚言を並べたてて私とエッチしようとしてらっしゃいますから、人見知りが激しいというわけではないです。大丈夫ですよ。おそらくクラスの女の子のレベルがあまりに低いので張り合いがないのでしょうか、とはっきり言っておきました」

「いや、それじゃ余計に心配されるだろ」

しかも嘘だし。……てか、不思議な力を使ったエッチってどんなだよ。

「確かに『ちゃんと避妊具使ってるんだろうな』って心配されてましたね」

「そっちの心配!？」

「今日は使わなきゃ駄目ですよ。なんなら貸しましょうか？」

「持ってるのかよ? ……いや、見せなくていいから。『ほら』じゃなくて。本当に必要ないんだよ」

その後も「どうして使わないんですか?」とか「不思議な力を使えば避妊具いらず、ってこと?」とかトンチンカンなことを言っていた委員長だが、歩いて10分。

升賀神社の鳥居を潜り、段をところで、うわお、と驚いて。ポンと手を打って。

「そういうことでしたか。これなら必要ありませんよね」
納得した。

その認識は絶対的に間違いだけれど。

——まあ、俺も少し驚いた。

ついでに言うと、俺の認識も間違っていた。

待ち合わせなんてしてないけれど、俺は今日も、巫女は六時ごろに来るんだろうと思っていたのだ。けれど、神社にはもう別の人が出て。賽銭箱に腰かけていた。

昨日の巫女ではなくて。

俺の学校の制服を着た金髪碧眼の男、だった。

00010 (後書き)

「感想とか、ポイントとか、……い、いッ、
いらないんだからね！」
？」

00011 (前書き)

書けちゃったんで、投稿。
たまには夜の投稿もいいですよね。

「よお、火野だろ？」

そう言って、賽銭箱の上に座った金髪碧眼は笑いながら片手をあげる。あまりにも流暢な日本語で少し拍子抜けした。

高校の制服を着た外国人。

金髪で、

碧眼の。

それが神社にいるっていうのはなんとなくミスマッチな光景だった。別に、珍しくはないんだろうけれど。でも少なくとも俺は、慣れてはいない。

金髪が立ち上がって、こっちに近づいてくる。距離が縮まるにつれて、かなり身長が高いことが分かった。百九十くらいはあるんじゃないだろうか。髪は洒落た感じにうねっているが、あまりに恰好良すぎて、パーマをかけているんじゃないかと思うほどだ。でも、制服を着ているってことは俺と同じ高校に通っているはず。校則でパーマは禁止されているから、やっぱりクセ毛なんだろう。そんなことを考えているうちに、やがて金髪は俺の前で立ち止まった。澄み切った空を思わせるような真っ蒼の瞳が俺を見下ろす。

「待ちわびたよ」

それを聞いた委員長が、

「巫女さんとの神秘プレイだけでは飽き足らず、今度は男の方と！？」
しかもガイコクジン！ いよっ！ ガチホモ！ 両刀使い！」

尋常じゃないテンションで喚きだす。そんな委員長に引いたのか、金髪が眉をしかめた。口は一応笑ってはいるが、本当に引いているようだった。

「気にしないでください。絡むとロクなことにならないですから。……それよりも、あなた、誰ですか？」

誰ですか、なんて随分とぞんざいな質問の仕方だったけれど、金

髪碧眼は特に気にする様子もなく

「あれ、未常みづねから俺のこと聞いてねえの？」

と言いながら頭をポリポリと掻いて、面倒クセエなあ、と呟く。それでも面倒くさそうには一切見えず、むしろすごく楽しそうに、

「俺は坂木光稀」

名乗った。……いや、一向に誰だかわからないが。むしろ「あれ？ 名前的に日本人なの？」というのと「ミヅネって誰だよ？」という疑問が新たに追加された。とりあえず「サカキミツキ？ いやらしい響きですね」と邪悪な笑みを浮かべている委員長に、正拳突きで少し強めの突っ込みを入れておく。

まったく……。本気でいやらしい響きだなどと思っているなら、委員長の感覚は常人の俺には、もう理解できない。耳か脳が腐ってるんじゃないだろうか。

「一応、未常と同じ、高二。今日も未常が来るはずだったんだけどさ。朝になって急に行きたくないって言い出してなあ。なんか、今すぐ消えて失せてしまいたいほどの超絶的に恥ずかしいがあったらしいよ。……そういうや、アイツ昨日、巫女ってたんだろ？ 関係あるのかなあ」

「……ああ、なるほど」

意外だった。どうやらミヅネというのは巫女の名前らしい。それだと彼女は高二ってことか？

「坂木さんは、……いや、坂木さんも、ですね。あなたもポルターガイスト使いなんですか？」

今までの話の流れだと、坂木さんは未常さんの知り合いということだ。ならば「その類」だろう、と思ったのだが、

「実はな——」

坂木さんは笑ったままで

「——実は俺、ホモなんだ。ウホ」

………は？

「冗談でしょう？」

「うん。冗談冗談。アハハ！」

すぐに認められた（委員長が舌打ちをした）。本当に笑えない冗談だ。恐怖とか身の危険とかを感じたのではなく、単純に面白くない。馬鹿にされてるんだろうか。

「信じなかったよな？」

「もちろん信じませんよ」

「だよな？ でもさ、状況が状況だったら、オマエは信じてたはずだ。例えば――、そうだな。オマエが放課後のトイレに一人きりで入っていたとする。そこに俺がいきなり入って行って背後にピツタリくっ付いて、さっきと同じに『俺、ホモなんだ。ウホ』。……どうする」

「……それなら逃げますね、確かに」

「だよな」

「つまるところ、何が言いたいんですか？」

さすがに少し、イライラしてきた。回りくどい喋り方っていうのは、どうも好きじゃない。

「だからさ。人間は状況や雰囲気ってのに、とてつもなく影響されるってことだよ。昼休みの教室で『見えない手が何トカカントカ』なんて言ったところで誰も信じるわけないし、手から火を出したところでそれはもう、ただの手品にしか見えない。だけど、神社っていう非日常的空間で、わざわざ巫女の恰好をした未常が火を出したからオマエはそれを超常現象と認識したし、くだらない説明を真に受けもしたんだろ。『嘘だと思って聞いてくれ』って未常に言われたのもすっかり忘れるほどにな」

急に、スウッと気温が下がった気がした。『嘘だと思って』？

確かに、そんなことを言っていたような。でも、それは――。

「火野。完全にハマったんだよ。オマエは」

それじゃあ、まるで。そんな言い方じゃ、まるで、昨日の驚きが、興奮が、全部、まるつきり……。

嘘だったみたいじゃねえか。

坂木さんは俺の頭に手をポンと乗せ、「ごめんな」と心の底から悪いと思っているように呟く（それでも笑ってはいたけれど）。そして、最も聞きたくなかった、けれど最も現実的なセリフを言った。「さっきの質問の答えだ。俺はポルターガイスト使いじゃない。もちろん、未常も、オマエも、ポルターガイストなんて操れない。…アレはトリックだったんだ」

00011 (後書き)

活動報告、の方にラストになるかもと書いたのですが、でも、やっぱりもう少しかかりそうです。

ストーリー的を『起承転結』で表すなら、今回の話は明らかに『転』ですが、ガツカリさせてしまったなら申し訳ないです。どうかどうか。引き続き読んでいただけたら嬉しいです。

00012 (前書き)

時間ができた。かけた。んで、投下。
荒いかもですが、少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

「トリック？ ……手から火を出す手品ならまだしも、でも、俺は髪の毛を鷲掴みされて、ぶん殴られたんですよ？ 何かに。いや、あれは絶対に『手』だったはずですよ」

そう。手だった。そして、あのとき巫女——じゃなくて、未常さんは俺が床に倒れるまでずっと手を叩いていたのだ。あれが彼女の手であるはずがない。それでもトリックがあるとすれば、誰かが建物の中に隠れていた？ ……それならさすがに気付くだろう。目を隠されたぶん、聴覚に神経が集中するから。

それなら。あれは手じゃなくて足だったとか？ それこそ、後ろで足を振り上げられたら、流石に気が付くだろうが。

とまあ、そんな可能性を上げては否定するだけの脳内会議を無言で繰り広げる俺をしばらく面白そうに見下ろしていた坂木さんだが、本当にハマっちゃってるねえ、と飽きたように肩をすくめてから、「交霊会」

と唐突に言った。

「霊と交わる会って書く場合もあるし、あるいは霊が降りてくる会とも。まあ、いずれにせよ音は一緒だな。コウレイカイ」

この人の話は前後に脈絡がないな。トリックの話じゃなかったのかよ。聞いていて疲れる喋り方だと思う。

「何ですか、それ」

「十八世紀ごろに欧米で流行した、みんなで霊を呼び出すちょっとしたパーティーだよ」

坂木さんは手を下げて、幽霊のポーズ。声色も不気味そうな声を出そうとしているようだが、それでも、どうしても楽しそうだ。

「いろんながあるんだけど、一つだけ霊を挙げよう。部屋の隅を黒い布で仕切ってね、その中にAさんが霊媒師と一緒にいる。霊媒師が手を叩くと霊が降りてきて、手でAさんの肩に触れるんだ。こ

んな風にさ」

坂木さんが俺の右肩に手を置く（いわずもがな、それを見て委員長は雄叫びを上げた）。

「でも当然、その手は幽霊の手じゃない。トリック。霊なんているわけないもんな。……いんや、もしかしたらいるのかもしれないけど、今説明した交霊会には本物の幽霊なんかでてこない」

俺は右肩に寄せられた手を払う。

「俺のも、……そうだったってことですか」

「うん、『そうだった』」

坂木さんは俺の後ろに回ると、背中を押す。

「簡単なトリックだから、説明するよ。今後は二度と種明かしなんてしないけど、最初だから、特別なー」

そのまま拝殿の方に歩かされる。委員長も飛び跳ねながらついてきた。視界の端から手が伸びる。賽銭箱を指差して、「まあ座りたまえ」と坂木さん。

自分に特殊能力がないと知って、ガツカリな俺は正直もう帰りたかったが、聞かずに済ませると後でモヤモヤしそうだから、言われるままにボロボロの賽銭箱に壊さないように、そうっと座った。

「とりあえず、昨日とおんなじことをやってみるよ」

坂木さんが俺の後ろに回る。

俺の前の、坂木さんがいなくなって空いたスペースに、委員長は腕を組んで、俺の前で仁王立ちになる。某笑ウせえるすまんを彷彿とさせる不気味な笑みを、本来は割と可愛いはずのその顔にぶちまけていた。

やがて。

ばん、ばん、ばん。

昨日と同じように頭上で音が、鳴り始めるが――。

「ぶっひょ――」

――ん！！！！！何というSM！！

――ほぼ同時。なぜか委員長が顔を紅潮させて、身悶え始めたの

だ
っ
た。
。

00012 (後書き)

感想とか、できれば欲しいです。いや、できればいいんで、別に、無くても良いっちゃ良いですけど。

00013 (前書き)

疲れました。

荒いかもだけど、もう読み返す気力もありません。

たぶん、コメントで指摘されない限り、ミスがあったって、生涯気づかないでしょう。

では、ッでした。

「なんというSM！ なんというSM！ なんというSM！ ——
あはン……。ハア、ハア、ハア……」

頬を赤らめた委員長は息も絶え絶えに、自分の肩を抱えるようにして身悶えている。その様子は、まあ、艶っぽいというか、色っぽいか、エロいというか、……そういう風なのだが、どうしてだろう。全然興奮しない。それどころか全身に嫌悪感が走った。耐え切れなくなつて、俺は目を閉じる。

「あれ？ 目隠しさせるの忘れちゃったなあ……。火野、目え開けちゃってる？」

ちようどそのとき、頭上から坂木さんの声。

「ごめんなさい。開けてました。けど、大丈夫です。今閉じてましたから！」

昨日の夜はまだ未常さんの脅しを信じていたのに、それでも、つい目隠しをとってしまった。でも、委員長が俺の前で吠えている限り、俺は絶対に目を開けないだろう。そう。ある意味、視界を塞ぐのが専門の目隠しよりも強力な目隠しである。まぶたの向こうの、真正の変態は。

「へえ、それなら、まあ良いや。……突然ですが、さて、ここで問題です。今、俺は何をしているんでしょうか？」

と坂木さん。

「何って、手を叩いてるんでしょう」

俺は答える。そこで、同時に、何かが、俺の頭を撫でた。髪の毛をかき乱すように。

「残念。不正解。違う。間違ってる。ねえ君。……聞いている？ 君だよ。女の子。何やってるか火野に説明してやってくれよ」

坂木さんは委員長に話しかけたらしかった。

その問いに、はつきりと

「自分の胸を揉みしだいていますが？　それが何か？」

自分の状況を報告した委員長だった。

……てか、『自分の胸を揉みしだいています』って……。しかも、『それが何か』って、さも当然みたいに言うな。

あと、そんな状態の委員長に、坂木さんも普通に話しかけるなよ、と思う。

「そうじゃなくて……　俺が言いたいののは、『俺が何をやってるか、火野に説明してやってくれ』ってことだから」

「なるほど。そういうことでしたか」

ここで委員長はグフツと喉を殴られたような音の笑い声。

「まさしく、変態坂木さんは火野くんの頭の上で、自己完結型SMを繰り返しています」

……は？

「オマエ、さっきからSM、SMって連呼してるけど、意味が分からないぞ。状況が全く掴めない」

「いっそのこと、自分で目を開けて確かめれば済む話ですよ？」

口を開けばシモネタが出る委員長にしては至極正しい意見だった。

……この前、彼女のまともな発言を聞いたのはいつだったっけ。

「でも、目開けてもいいんですか？」

俺が言うと

「別にいいよ。俺だったら、こんな訳の分からない説明されたら、じれったくて、とっとと目え開けるよ。ホント、火野はずいぶんと律儀なんだな。未常が目え付けただけあるなあ。関心、関心！」

『こんな訳の分からない説明』のところに妙に力が入っていた。たぶん、数分前から接触しただけで、もう嫌いになったんだろう、委員長のことが。

坂木さん、わかりますよ。俺もです。あまりにもキシヨいもんね。とにかく。

俺はまぶたを開き、まず目に入った委員長のおぞましい笑みに吐き気を催してから、次に頭の上に手の感触があるが、それでも上を

見て。

――で、啞然とした。

何って、だって。

ああ。委員長の言うとおりだ、と思ったから。

彼女の説明は訳の分からないそれではなかったのかもしれない。

むしろ的確だった。だって、

坂木さんは俺の頭に片手を乗せ、反対の手で、笑いながら自分の頬をパンパン叩いていた。

彼の外国人特有の（坂木さんが外国人かは知らないが、でも、見た目は外国人だ）白い肌は何度も叩かれたせいか、赤くなっている。痛いのか、目は心無しか潤んでいた。

さすがにシュールすぎるぜ！

「トリック……ってこれですか？」

シュール。でも、これなら確かに昨日起こったことの説明が付く。

手を叩きながら、俺の頭に触れる方法。

それはあまりにも単純だった。

それこそ、馬鹿みたいに。

トリックだったと最初に聞いたときには、軽い怒りすら覚えたが、今はただ、素直に感心してしまう。いや、本当は呆れてしまっているのか？ 俺は、こんな簡単に騙されてしまう自分に。

「……でも、どうしてこんなことを？」

わざわざブレザーを盗って（実は、まだブレザーを返してもらっていない。昨晚のトラブルのあとでは言い出せるはずもなく、シャツで登校した。もちろん、注意された）、夜の神社に呼び出して、巫女の衣装まで着て、で、ごっこ遊び……。何がしたかったんだよ。

「んー、簡単に言えば、ある種の勧誘みたいな？」

勧誘？

「俺としては、こんなことしなくても良かったんだけどさあ、未常

がやりたいって言うし。アイツは『驚いた時の反応が面白い奴を入れないと、つまんないから』とか言ってたよ。面接みたいなものだったんだろ」

回りくどい、この喋り方はどうにもならないらしい。坂木さんはまだまだ、話を続けそうだったが、今を逃すと、永遠に質問できない。そうだから、無理やりに話を切る。

「勧誘って、何のですか？」

「マジックに決まってるんだろ」

いや、決まってるない。……マジックって。

00013 (後書き)

まったく、読んでくれてありがとうございます。
感想・評価、頂けたら、嬉しいです。
頂けたら、小躍りします。
では。

00014 (前書き)

投下。

いつにも増して、中途半端なところで終わっていますが、ご了承ください。

まあ、そんなこんなで。

残念ながら、当然ながら、秘められし能力を持つ俺が良からぬことを企む連中をポッコンポッコンと倒していく、なんて中二病じみた展開に発展することはありえなくて、結局のところ、要するに、俺は一風も二風も変わった新歓イベントに、半強制的に参加させられただけだったのだ。

まだ出来てもない手品同好会の、だ。

……ん？ 入ったのかって？

そんなわけないだろ。

丁重にお断りした。

だって、練習とか面倒なもの。未常さん、いや、未常先輩とも気まずいし。

それに。坂木さんは、「同好会」を通り越して、最初から「部」にするつもりらしく、規定人数の十五人を集めると言っていた。それも口が硬いからという理由で、俺みたいな友達のいない奴ばかりを。どう考えても、無理だろう。

だから。

俺は今、いつものように一人で帰ろうとしている（委員長は掃除当番だったらしくて、「待っていてください」と言っていたけれど、無視した）……のだけれど。

校門に近づいたところで、ふと気づいた。校門横、コンクリートの部分の向こうから金色の頭が一つ、突き出しているのだ。明らかに覚えがあるそれは、こっちを向いて、

「おー、火野お！」

大きな声。やっぱり、坂木さんだった。彼は満面の笑みで片手を

上げて、もの凄いブンブンと振る。それを見て、大型犬みたいな人だな、と俺はぼんやり思った。可愛らしい、というか、心が和む。柄にもなく、俺がほっこりした気分になっていると、坂木さんが言う。

「遅いよ。待ちわびたよ。火野お！早く来いよお」

部活に誘われたときには結構冷たくあしらってしまったのに、それでも坂木さんが俺を待っていてくれたということに、俺は嬉しくなってしまう。また勧誘されるのだろうと分かっているけど、自然と早足になって歩き出す。

――が、すぐにその場で凍りついた。

唸り声と共に、コンクリートの裏から女子生徒が飛び出し、校門をがっしりと掴んだのだ。檻に入れられた凶暴な子犬を思わせる彼女は、

「来たな、変態！」

怒りのこもった、それでも、どこか力の入りきらないような、透き通った声で叫ぶ。

……誰？

ああ。

未常先輩か。

気付くのに時間がかかってしまったのは、彼女の格好がこの間とは全然違っていたからだろう。当然だが、この間とは違い、巫女装束ではなくて学校指定の制服を着ているし、髪はツインテールのように後ろで結かれている。幻想的な雰囲気はどこへ行ったのか、果てしなく可愛らしかった。

00014 (後書き)

感想・評価が欲しいです。

このままでは自分でも方向性がわかりません。
読んでくれている方、感想、評価をください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3111r/>

ウィザーズ・サークル 驚く僕を見て爆笑する先輩

2011年8月10日03時29分発行